

市への通勤、通学者は数が少ないだけでなく比率も低い。

両市はともに城下町として出発した点では同じであるが、高岡は6年たつたないうちに廃城となり、衰微の危機にたたされた。にもかかわらず、こうして現在県内第2の都市として存続している理由は、高岡の軍事拠点としての地理的優位性に目をつけた藩が、高岡を残さんがために商工業の保護育成に努めたことにある。高岡はこうして北陸屈指の商工業都市へと生まれ変わった。富山市や金沢市と比べると、今日の高岡の商業機能は昔の面影がないほどの低下ぶりを示しているが、工業においては今日もなお、高岡市の基盤を安定させるだけのシェアの高さは持ち続けている。

高岡市の工業の発祥は、金屋町の鋳物業である。明治になると他の銅器産地が徐々に廃れていったのに対し、高岡は製品が日用品など大衆的な物が多く、安定した仏具需要という強みがあった上に、確固とした商業資本があって独自の流通体系を確立していたために、販路を拡大することさえ可能であった。昭和に入ってから、銅器の技術の上にアルミニウム工業が起り、戦時、戦後のアルミ製品需要の増大によって、高岡のアルミ加工業は活況を呈した。その後、順次数を増やし、現在では243社で産地を形成し、全国の約30%のシェアを占めるまでに成長している。分布状況を見ても、銅器業者とアルミ関連企業には一致する点が多く、アルミ工業が如何に銅器業と深くかかわって発展してきたかが知られる。

高岡の製造品出荷額の約70%を占める金属製品、化学、パルプ、紙、非鉄金属の4業種のうち、金属製品、非鉄金属はアルミ工業でそのほとんどを占められている。化学、パルプ、紙は小矢部川下流から河口にかけての地域に分布している大規模工場によるところが大きい。これらの電力指向型の金属、化学工業に代表される大企業と、銅器、漆器等の中小、零細企業の混合形態をとっていることに、高岡市工業の特色がある。ところで、昭和59年の出荷額の増加率は、県平均の4.6%を大きく下回る0.9%の伸びに止まっている。それはこれら4業種の伸びの相対的低さ、逆に全国的に高い伸びを達成した機械の比率が大変低いことが要因である。

さて、高岡の都市形成の過程は、第1期の鋳物業、漆器業の基礎が築かれた時期、第2期の伏木港周辺の工業地帯形成期、第3期の第2次大戦後～現在の工業都市としての成熟期、の3期に分けて考えられる。即ち、そもそも高岡が存続できたのが、上から商工業の保護振興が図られたためであり、その後も工業の発展を伴い、又工業の発展により都市として成長してきたといえるのである。従って、近年來の人口の社会動態での減少傾向、伏木港の地位の低下、通勤、通学圏における高岡の影響力の相対的低さ等で表わされる高岡市の都市的地位の低下は、従来高岡市の都市形成を助長してきた工業あるいは商業の停滞に原因を帰すことができると考えられる。高岡の採るべき道はこのことから自ずと明らかにされたと言わねばなるまい。

## 周辺都市八王子市の商業機能

—中心商店街の現状と展望を探る—

山崎 敦子

八王子市の商業は以前程、市内外に勢力を及ぼさなくなってきた。駅ビルの出店（昭和58年）によって、商店街の中心はますます駅寄りとなった他、61年には、広過ぎる商店街空間を来街者に回遊してもらう目的で、ショッピング・モールがつくられた。商業、強いては街全体の活気を取り戻そうと様々な試みが企画・実行されているが、八

王子の中心商店街は何か盛り上がり欠けている。何故だろうか。大都会東京の一周辺都市だからか。本論では、最初に八王子市の商業機能を総括的にとらえ、のちに中心商店街の現状と問題（駅ビルやモール化の影響など）を、他周辺都市と比較しながら探っていきたい。そして、今後の課題を自分なりに考えてみるつもりである。

かつては“織物のまち”として知られていた八王子も、戦後になると首都圏整備法に基づく“市街地開発区域”に指定され、大工場の誘致や工業団地の造成、居住空間の拡大が行われた。と同時に、近隣都市の発達によって、八王子市は多摩地域の中心的、独立都市的性格を徐々に失っていったのである。今や約42万人もの人口をかかえ、20の大学をもつ都市へと成長したが、小売商業の伸張はこれに見合った程発達していない。これは、市域全体から考えると、市内交通の便の悪さ、鉄道沿線、新興住宅地の住民や若者たちは市外に容易に出かけられること、立川・吉祥寺・町田等の商業核の発達によって八王子の商圈が縮小してしまったこと、周辺市町村への大型店の進出などが原因といえる。当市の小売業の内容をみると、年間販売額では「各種商品、織物・衣服」など買回り性の高い業種の停滞傾向と、「飲食料品」を主とする最寄り性の強い業種の伸びが特徴的である。買回り品を扱う度合いが高い商業集積地は、それだけ商業力の強さを示しているとなると、この点も八王子の商業力弱体化の一因としてあげられる。

八王子の中心商業地は、伝統的経営を存続している甲州街道沿い商店街から、駅周辺へと移った。駅ビルによって、小売商店の経営は全般的に悪化し、市内外来街者数も著しい変化はみられていない。ショッピング・モールは来街者には評判がいいようだが、地元商店経営者は業種や駅からの遠近によって良悪が違っていた。若者向けの店（特

に衣料品店など）や駅に近い店は売上げが伸び、大型商品や生鮮食料品を扱う店、駅から遠い店、三和会通り（広い歩道＋一車線分備えたセミ・モール）沿いの商店は、売上げが落ちている。顧客としての一大勢力は若者層であり、八王子の中心商店街では、彼らに受ける商店の集積、同業種や関連業種ごとの集積に欠けている。雨の日の客を逃してしまったアーケードの撤廃、駐車場・駐輪場の著しい不足も、商業集積力の拡大を妨げている要因といえる。

立川市、大宮市、千葉市、八王子市といった4つの周辺都市の中心商店街を比較してみた結果、多くの共通点が得られた。中でも最も重大と思われる問題はアメニティの欠如である。人々は都市に「場所のもつ感じのよさ」を強く求めるようになり、商業第一主義で形成された周辺都市の中心商店街は、都心の高次の商業集積地に比べて、環境の悪さが目立ってきた。都会とふるさととの中間に位置し、平均的な特徴しかもたない周辺都市は、その個性が希薄で、存在意義自体がゆらぎかけている。

八王子市の商業活性化は、こうした状況をふまえて、緑や公園、文化・娯楽施設といった環境の改善や多目的市街地を口指すこと、駐車場・駐輪場の設置、商店立地の再編成、地元商店経営者への援助が必要であろう。中心商店街は、商業発展の中核として、現実に即した積極的な試みを止むことなく続けていかねばならない。

## 栃木県茂木町の地域的性格に関する考察

吉村尚美

栃木県の芳賀郡東部地域は、県内でも遅れた地域であると言われてきた。特に茂木町は農業以外に基盤となるような産業の見られない、過疎に泣く町である。しかし歴史的には、江戸時代、細川氏の城下町として発展し、明治中期頃には民営たばこ製造の中心地として、他市町村に勝って、活気を呈する地域であった。本論文は、こうした茂木町が、どのような地域的特性を持つのかについて考察してゆくものである。

茂木町は、栃木と茨城の県境を走る八溝山地の

中に位置し、地形的には4つに区分できる。それぞれの地形区で、地質、谷の解析の程度、傾斜などに違いが見られ、したがって、集落形態や、農業的土地利用も異なっている。茂木町南部をほとんど占める鷲足山塊は、中生界の地質から成り、谷の解析は進んでおらず中央にある沖積地が目だつのみになっている。山地の傾斜は急で、山腹の農業的土地利用の可能性は乏しく、集落も、沖積地の端に点々と形成されている。これに対し北東部を覆う鷲子山塊は、第三紀層から成り、谷もあ